放課後等デイサービス利用者の援助ニーズの考察
―保護者の視点から―

What kind of supports do parents of
after-school-day-service-users want?

渡邉孝祐
跡見学園女子大学大学院
人文科学研究科臨床心理学専攻
Kosuke Watanabe
Division of Clinical Psychology,
Graduate School of Humanities, Atomi University

要　約

2012年，厚生労働省は放課後や学校が休業するときに障がいをもつ子どもが過ごす場所として，放課後等デイサービス（以下，放デイ）を制度化した。その利用者は17万人を超えている。実施するに当たってのガイドラインも整備されてはいるが，その支援は様々であり，一定の質が担保されているとはいえない。より良い支援を提供するためには，子ども（利用者）のニーズと保護者のニーズを把握する必要がある。そこで本研究では，保護者の視点に焦点を絞り，「放デイを利用している保護者は何を求めているのか」についての検討することを目的とする。放デイを利用している保護者のうち，協力の同意の得られた５名に対して「放デイで，満足している点と改善してほしい点，今後行ってほしいサービス」についての半構造化面接（30分～１時間程度）を行い，修正版グラウンデッドセオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach：以下，M-GTA）を用いて分析を行った。結果として今後求めることとして＜自立を促すような支援内容＞など７つのカテゴリーが示唆された。本研究から結果で得られたニーズに応える支援を検討すること，それらの支援と利用者の満足度との関連などについて今後検討する必要があると考えられた。

１．問題の背景

厚生労働省（2018）によると，2018年11月の時点では，放課後等デイサービスを利用している児童数は，17万３千人を超えている。多くの児童生徒が利用しており，それに応えるように放課後等デイサービスの事業所数は増加している。また，厚生労働省（2015）によると，平成24年度から平成26年度の２年間で事業所数は約２倍に増加している。これらのことから，放課後等デイサービスが現代の社会に必要とされ，大切な役割を担っていることがわかる。

しかしながら，放課後等デイサービス事業は新しい支援であり，サービスにも開きがある（文部科学省2017）。民間の事業所が参入し，利用者に選択の自由が生まれた

反面，問題点も指摘されている。「一部の事業所では，職員の多数を学生アルバイトにして人件費を抑制するなど『もうけ主義』に陥り，報酬を不正に請求して処分を受ける状況も生まれている。」（障害のある子どもの放課後保障全国連絡会2017）という指摘もされている。そのような事業所に対応するため，厚生労働省は「支援の一定の質を担保するための全国共通の枠組みが必要であるため，障害児への支援の基本的事項や職員の専門性の確保等を定めたガイドラインの策定が必要」，とし，「放課後等デイサービスガイドライン」を示した（厚生労働省2017）。ガイドラインには事業所が行うことについての記載はあるが，その実施は各事業所に一任されている現状がある。ガイドラインには，保護者向けの放課後デイサービス評価表もあり，保護者からの意見を反映できるように配慮しているが，質問項目の内容が広く，保護者のニーズを正確にとらえられるものではない。また，先行研究において吉村（2012）は発達障害のある子どもの保護者が期待するサポートを明らかにする尺度を作成し，相談・療育機関に対する保護者のニーズについて検討している。その中で「相談・療育機関におけるサポートにはどのようなものがあるか」について検討し，「保護者のもつニーズ」と「子どもに対するニーズ」を示したが，実際に利用している保護者が何を求めているのかについての検討は十分になされていない。

現在，放課後等デイサービスのサービスは多岐にわたり，送迎を行っている事業所や食事を提供している事業所もある。放課後等デイサービスの利用者はもちろんのこと，日々利用者を支える保護者に対しても，よりよい支援を行っていくためには，利用者やその家族のニーズを見極め，ニーズに沿った支援を行っていくこと必要がある。より高度な専門的な援助を求めているのか，それとも長時間の預かりなどのレスパイト機能を求めているのか，または，その両方を求めているのか，それ以外のことを求めているのかを明らかにすることは，今後の放課後等デイサービスの運営に必要なことと考えられ，利用者やその保護者に対してよりよい支援の一助となると考えられる。

そこで本研究では，「放課後等デイサービスを利用している保護者は何を求めているのか」についての検討を行う。

２．研究１

（１）目的

研究１では，放課後等デイサービスを利用している保護者が持つニーズに焦点を当て，保護者が，放課後等デイサービスからどのようなサービスが得られることを求めているかについて検討することを目的とする。

（２）方法

１．調査協力者

関東圏に所在する放課後等デイサービスを利用している保護者のうち，同意の得られた保護者５名に行った。

２．調査日時

調査は，平成30年４月から平成30年５月に行った。

3．実施方法

放課後等デイサービスの責任者及び職員に研究の概要と実施方法について説明し，許可を得ることのできた3か所の放課後等デイサービスを利用している保護者計113名に対して研究の概要と実施方法を記載した用紙を責任者及び職員を通して配布した。その後同意の得られた保護者に対して半構造化面接を行った。質問内容としては，「現在利用している放課後等デイサービスで満足してる点と改善してほしい点」「放課後等デイサービスで行ってほしいサービスなど」である。

放課後等デイサービスについての特性を把握することを目的に，フェイスシートを作成し，実施した。無記名，自記式で行い，内容は，保護者の年齢・性別，子どもの年齢・性別・きょうだいの有無，診断名，手帳の有無，利用事業所数，利用頻度，職員の人数，専門的なスタッフの有無とその専門性であった。フェイスシートに通し番号を記入することでインタビュー内容との紐づけを行った。

実施場所に関しては，調査協力者の同意を得ることができ，プライバシーの守られる面接室，喫茶店などを利用した。インタビューの所要時間は40分～1時間程度であった。調査協力者には謝礼としてクオカードを贈呈した。フェイスシートとインタビュー記録の対応表は鍵のかかる部屋の鍵のかかる場所に厳重に保管することで情報の漏洩に配慮した。

4．分析方法

インタビューから得られた録音データをもとに逐語録を作成した。その後修正版グラウンデット・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach：以下，M-GTA）を用いて分析を行った。

5．倫理的配慮

調査の初めに，調査対象者の利用している放課後等デイサービスの責任者に対して調査内容について十分に説明をし，同意を得た。説明した内容は，以下の通りである。本調査は，調査協力者の自由意志によるものであり，調査の参加もしくは不参加によって，調査協力施設や調査協力者が不利益を被ることは決してないこと，今後の分析に使用するため，インタビュー内容は録音するが，録音したデータは外部に漏れることがないよう，厳重に保管し，分析終了時に削除すること，録音したデータをもとに論文を執筆するが，その際には，施設名，個人名，地域名，その他個人を特定することができる記述は一切せず，統計的に処理すること，調査協力者が利用しているデイサービスが行っている調査ではないことを調査協力者に伝えることについて説明した。調査協力者に対しても同様の説明をした。

以上の説明の後，調査の協力についての同意を書面への署名によって確認した。同意の撤回についても説明し，用紙を渡しその撤回方法についても説明した。

また，本研究は，跡見学園女子大学文学部臨床心理学科倫理検討員会にて承認を得た（受付番号17013）。

3．結果

（1）調査協力者の特性

分析対象になった調査協力者5名の特性

表１　分析対象者の基本特性

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん
保護者の性別	女性	女性	女性	女性	女性
保護者の年齢	35歳	45歳	48歳	54歳	43歳
利用者の性別	男性	男性	男性	男性	女性
利用者の年齢	8歳	16歳	15歳	15歳	16歳
障害名	自閉症スペクトラム症	ダウン症	知的障害 身体障害	知的障害	知的障害
手帳	療育手帳	療育手帳 障がい者手帳	療育手帳 障がい者手帳	療育手帳 障がい者手帳	療育手帳 障がい者手帳
所属	普通級	特別支援学校	特別支援学校	特別支援学校	特別支援学校

を表１に示す。

（２）分析までの過程

逐語データの作成

逐語データを作成するため，録音された半構造化面接の内容をすべて逐語録におこした。

＜１＞概念の生成

１）基底となる概念の生成

基本となる概念の生成を行うために，まず一人分のデータを無作為に選択し，M-GTAを用いて分析を行った。最初のデータ分析の対象は，調査協力者Aのデータであった。分析の結果，調査協力Aの逐語データから生成された概念は，14の概念であった。その後，調査協力者B，調査協力者C，調査協力者D，調査協力者E，についても順次分析をすすめ，５名分のデータから分析ワークシートを完成させた。調査協力者Dと調査協力者Eからは新たな概念が生まれなかったため，理論的飽和に至ったものと判断した

その結果，生成された概念は，子どもへの接し方の難しさ，家事や仕事を思うようにできない困難さ，活動場所のなさ，希薄な友人関係，見通しの持てない不安定な生活，利用者に対する支援，保護者に対する支援，送迎サービス，長時間のレスパイトケア，支援者に支えられている感覚，多様な体験ができる支援内容，新しい人間関係の広がり，支援内容の不透明さに対する不安と不満，支援内容に対するマイナス評価，支援者に対するマイナス評価，利用者の障害の程度や年齢によって生じるニーズの違い，預かりに対する考え方の相違，自立を促すような支援内容，困り感にダイレクトに作用するような支援内容，支援者との情報交換や連携，より受容的協力的な支援者，利用者と支援者が楽しめるような支援内容，個々のニーズに即した支援内容，専門的な支援内容，という24概念であった。概念名と定義の一覧を表３に示す。

＜２＞概念の生成

１）下位カテゴリーの生成

生成された概念と概念の関係を検討し，下位カテゴリーを生成した。概念間の関係の検討にあたって，分析ワークシートの理論的メモの内容や，逐語データのストー

表 3　概念名と定義

概念名	定義
1 子どもへの接し方の難しさ	障害をもった子どもを育てるにあたっての保護者が抱える困り感
2 家事や仕事を思うようにできない困難さ	児童の世話をすることに時間を割かなければならないため、生活に手が回らない
3 活動場所のなさ	放課後等デイサービス以外での活動場所の少なさ
4 希薄な友人関係	保護者から見た日常生活で利用者自身が感じている困り感
5 見通しの持てない不安定な生活	帰宅後のスケジュールが決まっておらず、ルーティンが築きにくい生活
6 利用者に対する支援	利用者に対して行われている支援内容
7 保護者に対する支援	保護者に対しても行われている支援内容
8 送迎サービス	送迎サービスによる保護者の負担の軽減
9 長時間のレスパイトケア	長時間の預かりサービスによる保護者の負担の軽減
10 支援者に支えられている感覚	放課後等デイサービスの支援者からのサービスから複数人で子どもを支える感覚
11 多様な体験ができるサービス内容	外出支援など日々の生活ではできない体験をさせてくれる支援内容
12 新しい人間関係の広がり	デイサービスを通した、子どもと大人の人間関係が広がり
13 支援内容の不透明さに対する不安と不満	サービスの内容が外から見えにくいため感じる不信感や行き始めたら想像と違い嫌な気持ちになった体験
14 支援内容に対するマイナス評価	適切でない支援を行うデイサービスに感じるマイナス評価
15 支援者に対するマイナス評価	虐待などを行う支援員に対する否定的な評価
16 利用者の障害の程度や年齢によって生じるニーズの違い	通っている学校の違いや年齢によって変わってくる求める支援内容
17 預かりに対する考え方の変化	保護者によって異なる預かりの重要性
18 自立を促すような支援内容	利用者がデイサービスで自立ができるような支援内容
19 困り感にダイレクトに作用するような支援内容	保護者が行ってほしいサービス内容
20 支援者との情報交換や連携	デイサービスでの活動などについての情報開示と連携
21 より受容的協力的な支援者	保護者が安心して任せられる支援者の姿
22 利用者と支援者が楽しめるような支援内容	楽しく活動できる支援内容
23 個々のニーズに即した支援内容	利用者の成長や障害の程度によって対応していく支援内容
24 専門的な支援内容	放課後等デイサービスの利用者と保護者に対して専門的な支援を求める姿勢

リーを参考にして，放課後等デイサービスに対するニーズについて説明できるようなカテゴリーの生成を目指した。

以下，概念を下線で，下位カテゴリーを＜＞で示す。

＜放課後等デイサービスを利用する前の保護者における困り感＞下位カテゴリーの生成

子どもへの接し方の難しさ，家事や仕事を思うようにできない困難さは，発達特性がある子どもたち対してのどのように接して良いかわからない保護者の困り感や，子どもたちへの対応に追われて家事が思うようにできない様子や，仕事の幅が制限されてしまう困難さが語られていた。この２つの概念を包括するようなカテゴリーが生成されると考え，＜放課後等デイサービスを利用する前の保護者における困り感＞下位カテゴリーを生成した。

＜放課後等デイサービスを利用する前の利用者における困り感＞下位カテゴリーの生成

活動場所のなさ，希薄な友人関係，見通しの持てない不安定な生活は，放課後に他の児童と遊ぶ，または１人で遊びに行くことが困難である様子や同世代の子どもとの関係性を結ぶことが難しい様子，日々の生活の中でのイレギュラーな変化などで見通しを持つことができず，パニックになってしまう様子など，保護者から見た利用者の困り感が語られていた。この３つの概念を包括するようなカテゴリーが生成されると考え，＜放課後等デイサービスを利用する前の利用者における困り感＞下位カテゴリーを生成した。

＜利用する前に放課後等デイサービスに求めていた支援＞下位カテゴリーの生成

利用者に対する支援，保護者に対する支援，送迎サービス，長時間のレスパイトケアでは，放課後等デイサービスを利用し始めてからの利用者，保護者への支援と特に保護者が助かっていると感じている送迎と預かりサービスについての内容が語られていた。この４つの概念を包括するようなカテゴリーが生成されると考え，＜利用する前に放課後等デイサービスに求めていた支援＞下位カテゴリーを生成した。

＜放課後等デイサービスを利用し始めたことで感じた有効な支援＞下位カテゴリーの生成

支援者に支えられている感覚，多様な体験ができる支援内容，新しい人間関係の広がりでは，利用者だけではなく，保護者も支援者にサポートを受けているという内容や，利用者が放課後等デイサービスを利用することでそれまでの生活では行うことのできなった内容の活動（工場見学やサーカスなど）ができ活動の幅がひろがったこと，放課後等デイサービスを利用することで利用者と保護者双方に新たな人間関係が生まれたことについて語られていた。この３つの概念を包括するようなカテゴリーが生成されると考え，・＜放課後等デイサービスを利用し始めたことで感じた有効な支援＞下位カテゴリーを生成した。

＜放課後等デイサービスに対して不満足な点＞下位カテゴリーの生成

支援内容の不透明さに対する不安と不満，支援内容に対するマイナス評価，支援者に対するマイナス評価では，放課後等デイサービスを利用する上で不安なことが語られていた。この３つの概念を包括するようなカテゴリーが生成されると考え，＜放課後等デイサービスに対して不満足な点＞下位カテゴリーを生成した。

＜放課後等デイサービスについての保護者の考察＞下位カテゴリーの生成

利用者の障害の程度や年齢によって生じるニーズの違い，預かりに対する考え方の相違では，放課後等デイサービスの利用について，保護者が受け身的に利用するのではなく，取捨選択を行っていく必要があるということが語られていた。この２つの概念を包括するようなカテゴリーが生成されると考え，＜放課後等デイサービスについての保護者の考察＞下位カテゴリーを生成した。

＜放課後等デイサービスに今後求めること＞下位カテゴリーの生成

自立を促すような支援内容，困り感にダイレクトに作用するような支援内容，支援者との情報交換や連携，より受容的協力的な支援者，利用者と支援者が楽しめるような支援内容，個々のニーズに即した支援内容，専門的な支援内容は放課後等デイサービスを利用することを通じて，今後どのような支援を利用したいかという内容のことが語られた。

この７つの概念を包括するようなカテゴリーが生成されると考え，＜放課後等デイサービスに今後求めること＞下位カテゴリーを生成した。

以上より，７つの下位カテゴリーが生成された。下位カテゴリーを表４として示す。

２）上位カテゴリーの生成

生成した下位カテゴリーを「放課後等デイサービスを利用している保護者の方はどのようなサービスを求めているのか」というリサーチ・クエスチョンに基づき，精査を行った。

以下，下位カテゴリーを＜＞で，上位カテゴリーを【】で示す。

【放課後等デイサービスを利用する前の困り感】上位カテゴリーの生成

＜放課後等デイサービスを利用する前の保護者における困り感＞，＜放課後等デイサービスを利用する前の利用者における困り感＞は，放課後等デイサービスを利用する前の生活での困難さを表している。この２つのカテゴリーを包括するような上位カテゴリーが生成されると考え，【放課後等デイサービスを利用する前の困り感】上位カテゴリーを生成した。

【サービス利用を始めてからの気づき】上位カテゴリーの生成

＜利用する前に放課後等デイサービスに求めていた支援＞，＜放課後等デイサービスを利用し始めたことで感じた有効な支援＞，＜放課後等デイサービスに対して不満足な点＞は放課後等デイサービスの利用を始めてから明らかになった放課後等デイサービスに対する気づきを表している。この３つのカテゴリーを包括するような上位

表4　下位カテゴリー一覧

下位カテゴリー	概念
放課後等デイサービスを利用する前の保護者における困り感	子どもへの接し方の難しさ
	家事や仕事を思うようにできない困難さ
放課後等デイサービスを利用する前の利用者における困り感	活動場所のなさ
	希薄な友人関係
	見通しの持てない不安定な生活
放課後等デイサービスに求めていた支援	利用者に対する支援
	保護者に対する支援
	送迎サービス
	長時間のレスパイトケア
放課後等デイサービスを利用し始めたことで感じた有効な支援	支援者に支えられている感覚
	多様な体験ができる支援内容
	新しい人間関係の広がり
放課後等デイサービスに対して不満足な点	支援内容の不透明さ
	支援内容に対するマイナス評価
	支援者に対するマイナス評価
放課後等デイサービスについての保護者の考察	利用者の障害の程度や年齢によって生じるニーズの違い
	預かりに対する考え方の相違
放課後等デイサービスに今後求めること	自立を促すような支援内容
	困り感にダイレクトに作用するような支援内容
	支援者との情報交換や連携
	より受容的協力的な支援者
	利用者と支援者が楽しめるような支援内容
	個々のニーズに即した支援内容
	専門的な支援内容

カテゴリーが生成されると考え，【サービス利用を始めてからの気づき】上位カテゴリーを生成した。

【保護者の今後に対する考え】上位カテゴリーの生成
＜放課後等デイサービスについての保護者の考察＞，＜放課後等デイサービスに今後求めること＞では，放課後等デイサービスを保護者はどのように利用していくかを考え，自分に必要なサービスを求めていくことを示している。この2つのカテゴリーを包括するような上位カテゴリーが生成されると考え，【保護者の今後に対する考え】上位カテゴリーを生成した。

以上より，全ての調査協力者から抽出されたカテゴリーは，＜放課後等デイサービスを利用する前の保護者における困り感＞，＜放課後等デイサービスを利用する前の利用者における困り感＞，＜利用する前に放課後等デイサービスに求めていた支援＞，＜放課後等デイサービスを利用し始めたことで感じた有効な支援＞，＜放課後等デイサービスに対して不満足な点＞，＜放課後等デイサービスについての保護者の考察＞＜放課後等デイサービスに今後求めること＞の7下位カテゴリー，【放課後等デイサービスを利用する前の困り感】，【サービス利用を始めてからの気づき】，【保護者の今後に対する考え】の3つの上位カテゴリーとなった。最終的な上位カテゴリーと下位カテゴリー，概念を表5に示す。

表５　カテゴリー一覧

上位カテゴリー	下位カテゴリー	概念
放課後等デイサービスを利用する前の困り感	放課後等デイサービスを利用する前の保護者における困り感	子どもへの接し方の難しさ
		家事や仕事を思うようにできない困難さ
	放課後等デイサービスを利用する前の利用者における困り感	活動場所のなさ
		希薄な友人関係
		見通しの持てない不安定な生活
サービス利用を始めてからの気づき	放課後等デイサービスに求めていた支援	利用者に対する支援
		保護者に対する支援
		送迎サービス
		長時間のレスパイトケア
	放課後等デイサービスを利用し始めたことで感じた有効な支援	支援者に支えられている感覚
		多様な体験ができる支援内容
		新しい人間関係の広がり
	放課後等デイサービスに対して不満足な点	支援内容の不透明さ
		支援内容に対するマイナス評価
		支援者に対するマイナス評価
保護者の今後に対する考え	放課後等デイサービスについての保護者の考察	利用者の障害の程度や年齢によって生じるニーズの違い
		預かりに対する考え方の相違
	放課後等デイサービスに今後求めること	自立を促すような支援内容
		困り感にダイレクトに作用するような支援内容
		支援者との情報交換や連携
		より受容的協力的な支援者
		利用者と支援者が楽しめるような支援内容
		個々のニーズに即した支援内容
		専門的な支援内容

（1）概念図

次に，カテゴリー同士がどのように関係しているかを線や矢印などで示しながら検討し，カテゴリー相互の影響関係や，保護者の変化のプロセスを概念図として示した（図1）。その際，分析のテーマである「放課後等デイサービスを利用している保護者はどのようなサービスを求めて放課後等デイサービスを利用しているのか」という問いの“プロセス”を十分に表現できるように作成した。

また，生成したカテゴリーは5名から得られたデータを網羅していることが確認されたことから，理論的飽和に至ったと判断された。

（2）ストーリーライン

ストーリーラインとは，分析結果を生成した概念とカテゴリーだけで簡潔に文章化したものである（木下，2003）。概念は下線で示し，下位カテゴリーは＜＞，上位カテゴリーは【】で示す。

＜放課後等デイサービスを利用する前の保護者における困り感＞として，障害特性ゆえに，利用者への接し方の難しさを感じている。さらに1人での留守番が困難であったり，学校から頻繁に呼び出されるなど，家事や仕事が思うようにできない困難さも感じているようである。また，＜放課後等デイサービスを利用する前の利用者における困り感＞としては，近年の遊びの場の減少も伴い，活動の場のなさから家の中での遊びを余儀なくされている様子や，学校の人としか関わらない希薄な人間関係が保護者の視点から観察されている。また，日常がいつも同じパターンではないことから見通しの持てない不安定な生活を送らざるを得ないことから調子も不安定になりがちになるようだ。＜放課後等デイサービスを利用する前の保護者における困り感＞と＜放課後等デイサービスを利用する前の利用者における困り感＞が相互にネガティブに関係しており【放課後等デイサービスを利用する前の困り感】となっているようである。なお，発言の上では「放課後等デイサービスを利用して楽になった」とあるが，利用前の「困難さ」を表しているととらえた。

そのようななかから，【放課後等デイサービスの利用を始めてからの気づき】が生まれるようであった。見通しの持てる関りや遊びとその場の提供など利用者に対する支援や利用者に対するかかわり方についてのアドバイスや相談にのるなどの保護者に対する支援，学校から施設，そして自宅までの送迎サービス，利用者を預かることで，保護者の負担を軽くする長時間のレスパイトケアなどを受けることで，保護者と利用者の負担が軽減されているようである。それ以外にも，今までは保護者だけで育てている感覚がしていた部分が放課後等デイサービスの職員と共に歩むことで，支援者に支えられている感覚が生まれるようである。さらに，工場見学や陶器づくりなど多様な体験ができる支援内容や日々の活動を通して，保護者，利用者ともに新しい人間関係の広がりを感じているようである。このようにサービス利用前は考えていなかった＜放課後等デイサービスを利用し始めたことで感じた有効な支援＞を受ける

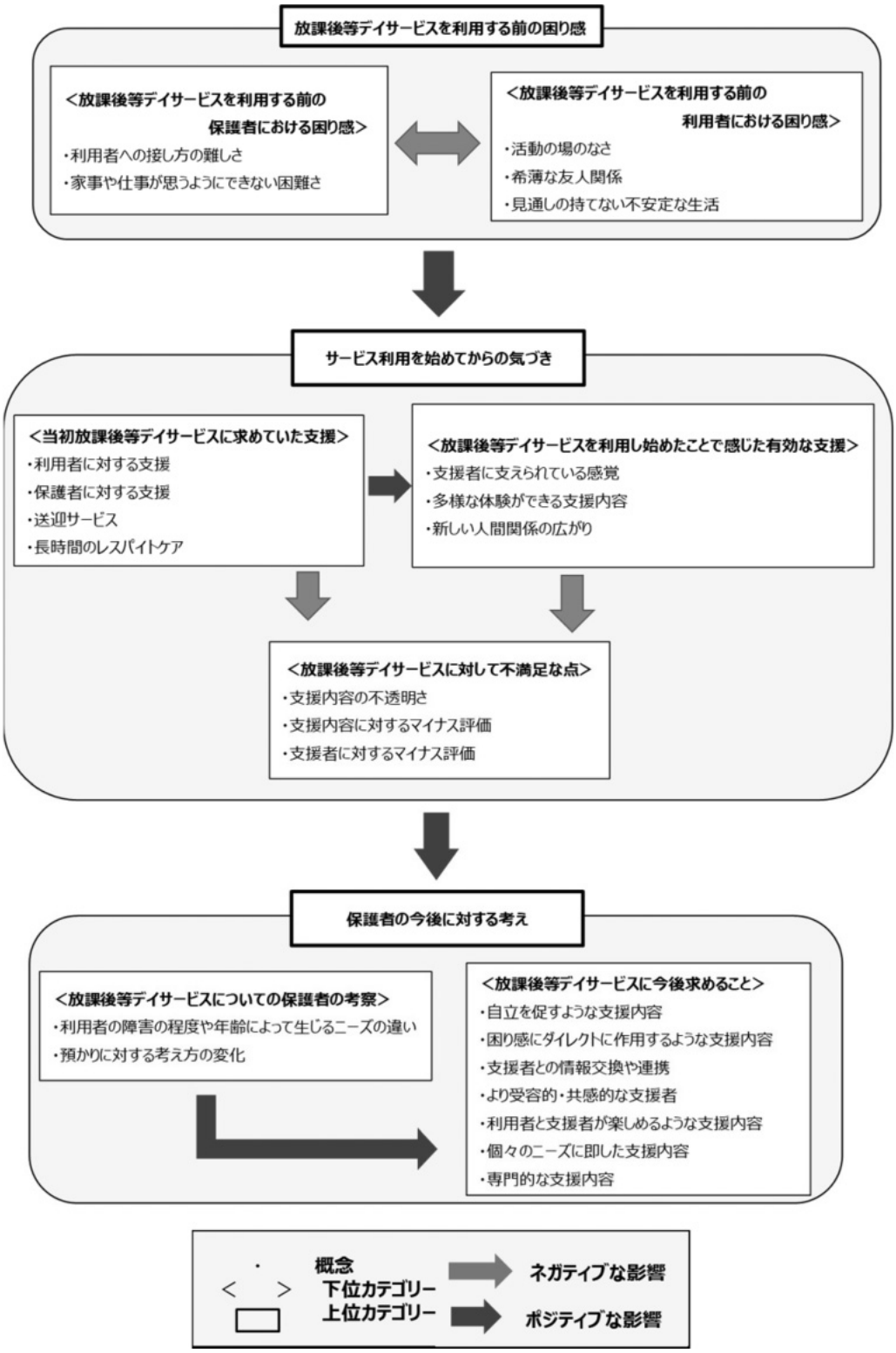
放課後等デイサービスを利用する前の困り感
<放課後等デイサービスを利用する前の保護者における困り感>
・利用者への接し方の難しさ
・家事や仕事が思うようにできない困難さ
<放課後等デイサービスを利用する前の利用者における困り感>
・活動の場のなさ
・希薄な友人関係
・見通しの持てない不安定な生活
サービス利用を始めてからの気づき
<当初放課後等デイサービスに求めていた支援>
・利用者に対する支援
・保護者に対する支援
・送迎サービス
・長時間のレスパイトケア
<放課後等デイサービスを利用し始めたことで感じた有効な支援>
・支援者に支えられている感覚
・多様な体験ができる支援内容
・新しい人間関係の広がり
<放課後等デイサービスに対して不満足な点>
・支援内容の不透明さ
・支援内容に対するマイナス評価
・支援者に対するマイナス評価
保護者の今後に対する考え
<放課後等デイサービスについての保護者の考察>
・利用者の障害の程度や年齢によって生じるニーズの違い
・預かりに対する考え方の変化
<放課後等デイサービスに今後求めること>
・自立を促すような支援内容
・困り感にダイレクトに作用するような支援内容
・支援者との情報交換や連携
・より受容的・共感的な支援者
・利用者と支援者が楽しめるような支援内容
・個々のニーズに即した支援内容
・専門的な支援内容
概念
下位カテゴリー
上位カテゴリー
ネガティブな影響
ポジティブな影響

図１　概念図

ことができるようになった。しかしながら，満足な部分だけでなく，支援内容の不透明さ，支援内容に対するマイナス評価，支援者に対するマイナス評価などの＜放課後等デイサービスに対して不満足な点＞についても意識するようになるようであった。

それらを経て，【保護者の今後に対する考え】が生まれ始めるようであった。様々な利用者がいる中で，利用者の障害の程度や年齢によって生じるニーズの違いや，単に長時間預かってもらえばいいわけではないという預かりに対する考え方の相違などについて＜放課後等デイサービスについての保護者の考察＞が行われていた。それらを踏まえて，就労に向けた支援や，着替え，手先の器用さなどの自立を促すような支援内容，現在起こっているトラブルなどに対して直接的な働きかけを行う困り感にダイレクトに作用するような支援内容，その日の利用者の様子や，学校や保護者と連携した取り組みなどの支援者との情報交換や連携，利用者だけではなく，保護者に対してもより受容的・協力的な支援者，利用者と支援者が楽しめるような支援内容，コミュニケーションスキルや学習などの個々のニーズに即した支援内容，利用者と保護者に対して求められる専門的な支援内容など＜放課後等デイサービスに今後求めること＞を強く感じるようであった。

これらのニーズに応えるような支援をしていくことや，放課後等デイサービスのマイナス点について改善していくことは，障害をもった利用者をもつ保護者への有効な支援につながると考えられる。

4．考察

1．研究Ⅰで見出された概念

リサーチ・クエスチョンである「放課後等デイサービスを利用している保護者はどのような心理的プロセスを経てどのようなサービスを求めているのか」を検討するために，分析テーマとして「放課後等デイサービスを利用している保護者の求めるサービスにはどのような心理的プロセスがあるか」を設定した。そして，放課後等デイサービスを利用している保護者5名に対して半構造化面接を実施し，その逐語データを，M-GTAを用いて分析した。

その結果，子どもへの接し方の難しさ，家事や仕事を思うようにできない困難さ，活動場所のなさ，希薄な友人関係，見通しの持てない不安定な生活，利用者に対する支援内容，保護者に対する支援内容，送迎サービス，長時間のレスパイトケア，支援者に支えられている感覚，多様な体験ができる支援内容，新しい人間関係の広がり，支援内容の不透明さに対する不安と不満，支援内容に対するマイナス評価，支援者に対するマイナス評価，利用者の障害の程度や年齢によって生じるニーズの違い，預かりに対する考え方の相違，自立を促すような支援内容，困り感にダイレクトに作用するような支援内容，支援者との情報交換や連携，より受容的協力的な支援者，利用者と支援者が楽しめるような支援内容，個々のニーズに即した支援内容，専門的な支援内容，という24概念と，＜放課後等デイサービスを利用する前の保護者における困り感＞，＜放課後等デイサービスを利用する前の利用者における困り感＞，＜利用する前に放課後等デイサービスに求めていた

支援＞，＜放課後等デイサービスを利用し始めたことで感じた有効な支援＞，＜放課後等デイサービスに対して不満足な点＞，＜放課後等デイサービスについての保護者の考察＞＜放課後等デイサービスに今後求めること＞の７下位カテゴリーと，【放課後等デイサービスを利用する前の困り感】，【サービス利用を始めてからの気づき】，【保護者の今後に対する考え】という３つの上位カテゴリーが生成された。

このことから，「放課後等デイサービスを利用している保護者の求める支援内容には，【放課後等デイサービスを利用する前の困り感】，【サービス利用を始めてからの気づき】，【保護者の今後に対する考え】という心理的プロセスがある」という結果を得た。

２．下位カテゴリーについての考察

１）＜放課後等デイサービスを利用する前の保護者における困り感＞下位カテゴリー

子どもへの接し方の難しさでは，発達特性を持つ自分の子どもにどのように接して良いかわからないといった困り感が表れていた。周囲に障害を持った子どもを持つ親がいない場合は，相談する相手がおらず１人で抱え込みすぎてしまうこともある。保護者自身の不安定さや障害を持った子どもを育てる不安感が伺える。

家事や仕事を思うようにできない困難さでは，子どもから目を離せないため，子どもたちが学校から帰ってきた後に夕食の準備や買い物がスムーズに行えない困難さが訴えられていた。また，子どもたちが帰る時間に家に保護者がいる必要があり，核家族の場合は母親が在宅することが多くなり，労働に対しても支障をきたすことが伺える。家事と発達特性のある子どもの育児を同時進行で行うことは難しく，保護者のストレスとなることが伺える。

２）＜放課後等デイサービスを利用する前の利用者における困り感＞下位カテゴリー

活動場所のなさでは，利用者の特性から放課後の遊びの場があまりない様子や，クラスメイトなどと遊べない様子が語られた。コミュニケーションに困難さを抱える児童の場合は，自分からグループに入ることができず，孤立してしまうことは少なくはない。すると帰宅するしかなくなってしまうが，帰宅してもやることがなくパニックになることもある。そのことでの利用者，保護者にストレスがかかることが伺える。

希薄な友人関係は上記のことと関連している。特に特別支援学校の生徒は家と学校との往復となり，特定の人間関係の中での生活を余儀なくされる。保護者としては多様な人間関係を経験してほしいと感じているようであるが，現状としては難しい様子が伺えた。

見通しの持てない不安定な生活では，日常生活の不確定さが語られた。保護者に急な用事が入ってしまった場合に，他の家族がいない時には利用者を家に一人にするわけにはいかず，利用者にも付き合ってもらう場面がある。そのような時に急な予定変更に利用者がついていくことができず，利用者に大きなストレスがかかるが，保護者としても仕方のないことであり，保護者自

身にもストレスがかかることが伺えた。

3）＜利用する前に放課後等デイサービスに求めていた支援＞下位カテゴリー

保護者に対する支援としては児童の特性に応じた関わり方などの助言や保護者に対してのきめ細かい調整が挙げられていた。中でも送迎サービスと長時間のレスパイトケアは保護者の負担を大きく軽減することが伺えた。送迎サービスやレスパイトケアを利用することで保護者の活用できる時間が大きく広がり，日々の生活にゆとりを持つことができるようである。

利用者に対する支援としては，遊び場所の提供，学習支援があるようである。遊び場所の提供では，公園に行き指導員の元，安全に遊ぶことができることや，構造化された施設の中での活動のため，安全にも十分に配慮されたなかで遊ぶことができることが挙げられていた。また，学習支援では，普段は家では勉強しない児童でも，指導員の補助を得ながら宿題を行うことができているようである。宿題などを終えることができ，放課後の時間を楽しむことができることから，利用者のストレスが軽減され，有意義な放課後の時間を過ごすことができていることが伺える。

4）＜放課後等デイサービスを利用し始めたことで感じた有効な支援内容＞下位カテゴリー

支援者に支えられている感覚では，家族のみで子育てをしていた状況からデイサービスを利用することによって，専門的な知識を持った支援者が，ともに子育てをする頼もしさが語られていた。学校の先生とはまた異なった視点で利用者を見てくれているということが保護者にとっての放課後等デイサービスの強みとなっていることが伺える。

多様な体験ができる支援内容では平日や休日，長期休みなどに仕事などの関係で利用者との活動ができない保護者に代わって放課後等デイサービスの支援員が様々体験活動を提供することを示していた。具体的には工場見学や長距離外出が挙げられていた。集団生活に馴染むことに困難さを抱えている利用者でも，多くの支援員の補助の下であれば多彩な活動を行うことができるようである。利用者のストレスは軽減され，それに伴い保護者の負担やストレスも軽減されるようであった。

新しい人間関係の広がりでは利用者と保護者共に新しい人に出会うことができているようであった。利用者の人間関係が広がることによって多様な人との関係構築の練習となると考えているようである。

5）＜放課後等デイサービスに対して不満足な点＞下位カテゴリー

支援内容について公開している，若しくは保護者が実際に活動内容を見ることができる放課後等デイサービスもある。しかしながら一部の放課後等デイサービスでは，支援内容がわからず，何をしているのかを保護者がわかっていないことがあることが支援内容の不透明さに対する不安と不満から伺えた。

支援内容に対するマイナス評価では，その支援を行ってどのような意味があるのかが保護者目線からは分からない，若しくはきちんとした説明がないという現状が伺え

る。劣悪な環境では資格や経験を持たない支援員が対応している場合もある（放課後連2017）。保護者もこの部分に対して不信感をぬぐい切れないようである。

支援者に対するマイナス評価では，支援員による不適切な言動が挙げられていた。放課後等デイサービスでの虐待事件はいくつか報告されており（毎日新聞2018.9.28），問題視されている。このような問題が発覚した場合，保護者は安心して利用者を預けることができなくなり，放課後等デイサービス本来の有用性が失われる可能性がある。

6）＜放課後等デイサービスについての保護者の考察＞下位カテゴリー

利用者の障害の程度や年齢によって生じるニーズの違いでは，保護者が放課後等デイサービスに対するニーズについて語られた。普通級に在籍している利用者の保護者であるAさんは，在籍している放課後等デイサービスの利用者は，障がいの程度が重い利用者が多かった。Aさんは学習支援を特に求めていたが，そのような環境からか，Aさんが求めていた支援は受けにくかったようだった。一方で，特別支援学校に所属する利用者の保護者であるEさんは，周りの利用者の障がいの程度が比較的軽い利用者が多かったため，求めていたサービスを受けにくい状況にあったようだった。

預かりに対する考え方の相違では単に放課後等デイサービスを利用するのではなく，保護者と利用者にとって今，もしくは今後必要なことは何かを考える姿勢が伺えた。中には単に預かるだけではなく，今後役に立つスキルなどを放課後等デイサービスに求める保護者もいた。

一方で，育児に疲れ果て，一時的でも育児から解放されたいというニーズも伺えた。しかしながら，預かりに対しても否定的な意見が見られた。放課後等デイサービスに利用者を預けすぎてしまうと，利用者の様子がわからなくなってしまうという意見である。西日本新聞（2017,3,26）では，放課後等デイサービスを毎日のように利用することが，子どもたちの発達の阻害要因となっている可能性を危惧する記事が掲載されていた。利用者にとってどの程度，放課後等デイサービスを利用することが適切なのかを判断するのは保護者である。このような点から，サービス過剰ととらえられかねない現状が伺える。

7）＜放課後等デイサービスに今後求めること＞下位カテゴリー

自立を促すような支援内容では支援学校に在籍している高校生の利用者の保護者からの，自立に対する意見が伺えた。高校生になると，日常生活の自立はもちろんのこと，その先の就労について意識が向くようである。利用者の年齢が高くなるほど，このようなニーズは増加していると推察される。

困り感にダイレクトに作用するような支援内容では，広く集団に当てはまるような支援ではなく，保護者や利用者個人が持つ困り感について個別的な支援を求めるニーズが存在することが伺えた。利用者に対しては，普通級に在籍している利用者の保護者であるAさんはコミュニケーションなどソーシャルスキルについて，特別支援学校に所属している利用者の保護者のBさんは

集団行動や，定型発達の子どもたちが普通にできるようなことを利用者に体験させてあげたいというニーズを持っていた。

また，保護者のニーズでは，車いすでの生活を送る利用者の保護者であるCさんは，身体的な助言を求める発言があった。このように，個人レベルでのニーズは多岐にわたり，そのすべてを満たしていくことは容易ではないことが伺える。

支援者との情報交換や連携では，放課後等デイサービスで行った支援を知りたいという声や支援内容だけではなく，支援員とのコミュニケーションを取りたいという意見が伺えた。利用者を預ける以上，放課後等デイサービスの内情は把握しておきたいと考えるようである。

より受容的協力的な支援者では，理想の支援者像が語られていた。保護者から見た理想の支援者として，信頼できることが挙げられていた。自分の大切な子どもを預けるからには信頼している支援者に預けたいと思うことは当然ではあるが，なかなか難しい現状がある。

優れた支援内容だとしても。利用者が楽しめなければならない。利用者と支援者が楽しめるような支援内容では，放課後等デイサービスに求めることとして「楽しさ」が挙げられていた。その中で利用者だけが楽しいのではなく，利用者の家族や支援者自身も楽しめることで信頼感などが生まれることが伺えた。

個々のニーズに即した支援内容では利用者の年齢や障害の程度によって，保護者のもつデイサービスへのニーズが変化していることが伺える。小学生では障害の程度が重いほど，単純な預かりサービスを求める声があった。また，普通級に通っている保護者は学習面のサポートを強く望んでいた。中高校生になると，コミュニケーションや作業所的な活動を意識した支援を望むようであった。

専門的な支援内容では心理職を望む意見が多く見られた。専門的な知識を持った人物にはなかなか会う機会がなく支援を受けにくい。支援センター等には専門的なスタッフが配属されている場合もあるが，きめ細かい，継続的なサービスを受けることは難しい。そのような現実の中で放課後等デイサービスを利用する保護者は，身近な放課後等デイサービスに専門的なスタッフが配置されることを望むようであった。

上位カテゴリーについての考察

（1）【課後等デイサービスを利用する前の困り感】上位カテゴリー

下位カテゴリーである＜放課後等デイサービスを利用する前の保護者における困り感＞と＜放課後等デイサービスを利用する前の利用者における困り感＞から，【課後等デイサービスを利用する前の困り感】上位カテゴリーが生成された。

放課後等デイサービスを利用する以前は，保護者と利用者共にストレスフルな状況が続き，互いに負の影響を及ぼし合っていたことが推測される。このような関係は定型発達の児童でも見られることであるが，障害特性がより困難さを深刻にしていることが伺えた。外部サービスなしで子育てをしていくことは，両者に精神衛生上負の作用をもたらす可能性が大きく，積極的に外部の支援を受けていく姿勢や，外部からも支援の手を差し伸べていく必要性があ

ると考えられる。

（2）【サービス利用を始めてからの気づき】上位カテゴリー

下位カテゴリーである，＜利用する前に放課後等デイサービスに求めていた支援＞，＜放課後等デイサービスを利用し始めたことで感じた有効な支援＞，＜放課後等デイサービスに対して不満足な点＞から，【サービス利用を始めてからの気づき】上位カテゴリーが生成された。

放課後等デイサービスを利用し始めたことで，＜利用する前に放課後等デイサービスに求めていた支援＞を受けることができ，生活に余裕を持つことができるようであった。さらに放課後等デイサービスを利用し始めて気が付くことができた支援である，＜放課後等デイサービスを利用し始めたことで感じた有効な支援＞も加わり利用者，保護者ともに生活の幅が広がったように感じられる。しかしながらサービスの質の低下も相まってか，放課後等デイサービスの負の側面もあらわとなった。困難さに直面することで，保護者は自分に必要なサービスが何かを考えるようであった。

（3）【保護者の今後に対する考え】上位カテゴリー

下位カテゴリーである，＜放課後等デイサービスについての保護者の考察＞，＜放課後等デイサービスに今後求めること＞から，【保護者の今後に対する考え】上位カテゴリーが生成された。

放課後等デイサービスの利用を始めて，利用者と保護者に必要なサービスについて取捨選択を行うことが，＜放課後等デイサービスについての保護者の考察＞から見られた。その中で，今後の放課後等デイサービスを利用していくなかで，保護者と利用者にとって必要なサービスは何かを考え，ニーズが形成されていくようであった。これらのニーズは全体に共通しているものもあれば，個別的なものあるが，多くの保護者がここで示された，似たようなニーズを持っていることが推測される。

5．今後の課題

施設および保護者の方からの同意を得ることが難しく，インタビュー協力者におけるデータの偏りが存在していないとは言い難い。また障害の程度においても同様のことが言える。また，放課後デイサービスを利用して数年が経過した協力者が多いため，利用年数が短い調査協力者の考えが反映されていないことが考えられる。今後は調査対象地域を拡大し，偏りのより少ない研究にしていく必要がある。

謝　辞

大変お忙しい中，本研究のインタビュー調査並びに質問紙調査にご協力いただきました保護者の皆様，調査協力をいただきました放課後等デイサービス責任者並びに支援員の皆様には心から感謝いたします。また，妥当性の検討のために協力してくださった大学院生の皆様，そして長きにわたって指導してくださった松嵜くみ子教授には大変お世話になりました。本研究が少しでも子どもたちの健やかな成長の一助となることを願い，謝辞とさせていただきます。

参考・引用文献

江上瑞穂・田村光子（2017）．放課後等デイサービス利用者のニーズについての検討―アンケート調査の結果と考察から―植草学園短期大学紀要18，37-45

一般社団法人全国児童発達支援協議会（2012）．障害児通所支援の今後の在り方に関する調査研究
https://www.mhlw.go.jp/file/06Seisakujouhou12200000Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000067397.pdf（2018年11月15日 閲覧）

木下康仁（2003）．グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践-質的研究への誘い　弘文堂

木下康仁（2007）．ライブ講義M-GTA実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて　弘文堂

厚生労働省（2015）．現状・課題と検討の方向性
http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000103581.pdf（2018年11月15日閲覧）

厚生労働省（2017）．放課後等デイサービス　ガイドライン
http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000082831.html（2018年11月15日 閲覧）

厚生労働省（2018）．平成30年度障害福祉サービス等報酬改定の概要
https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000193399.html（2018年11月15日 閲覧）

厚生労働省（2018）．統計情報
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/toukei/index.html（2018年11月15日閲覧）

前田明日香（2009）．自閉症スペクトラム児と親の支援に関する調査研究-親のアンケート調査から-　立命館人間科学研究，19，29-41

丸山啓史（2009）．障害のある子どもの放課後・休日支援の現状と課題―保護者対象全国調査より―　障害者問題研究36(4)，72－79

丸山啓史（2014）．障害児の放課後活動の現状と変容―放課後等デイサービス事業所を対象とする質問紙調査から―　SNEジャーナル20(1)，165－177

三山岳（2008）．統合学童保育の巡回相談に求められる支援ニーズ：都内にある自治体における児童保育指導員への質問紙調査から　発達心理学研究，19，183-193

西日本新聞（2017.3.26）．障害児の放課後デイサービスに課題　連日利用，児童に負担感も
https://www.nishinippon.co.jp/feature/tomorrow_to_children/article/317220/（2018年11月15日閲覧）

障害のある子どもの放課後保障全国連絡会（2017）．放課後等デイサービスハンドブック　かもがわ出版

山本佳代子（2017）．K市における放課後等デイサービス事業所の現状と課題―放課後等デイサービス大度ラインを踏まえて―　西南女学院大学紀要21，107-114

吉村豊隆（2012）．相談・療育機関における発達障害児に対するサポートの研究～サポートに関する保護者のニーズの視点から～　跡見学園女子大学　人文科学研究科　臨床心理学専攻修士論文